

水 稻 新 品 種 「 む つ ほ ま れ 」 の 栽 培 特 性

山崎 季好・田名部嘉一・高館 正男・有馬喜代史*・三上 泰正**・蜂ヶ崎君男

(青森県農業試験場・*青森県農政課・**青森県農業試験場藤坂支場)

Growth Habits of New Rice Cultivar "Mutsuhomare"

Kiyoshi YAMAZAKI, Kaichi TANABU, Masao TAKADATE, Kiyofumi ARIMA*,

Taisei MIKAMI** and Kimio HACHIGASAKI

(Aomori Agricultural Experiment Station・*Agricultural Administration Section of Aomori Prefectural Government Office・**Fujisaka Branch, Aomori Agricultural Experiment Station)

1 ま え が き

「むつほまれ」は青森県における中生種地帯で「アキヒカリ」に大きく偏った作付を是正し、気象災害からの危険分散や消費市場における青森県産米の食味向上をはかるため、昭和61年に青森県の奨励品種に採用された。

本品種は良質多収で、食味が「アキヒカリ」より優る品種である。その他の特性についても「アキヒカリ」並か、優る特性を備えているものの、栽培上「アキヒカリ」とは異なる特性を有するので、その概要を報告する。

2 育 成 経 過

「むつほまれ」は、昭和49年に青森県農業試験場藤坂支場において、「トドロキワセ」と「ふ系104号」の雑種第1代を母とし、「藤329」を父として人工交配を行った雑

種の後代から育成されたものである。「トドロキワセ」は、いもち病抵抗性の強い良質多収品種である。「アキヒカリ（ふ系104号）」は、良質、強稈多収品種である。父親の「藤329」は「アキヒカリ」と同じ組合せの後代系統で、強稈で草姿、稈実が良い系統である。雑種第1～3代までは藤坂支場で集団栽培を行い、昭和52年青森県農業試験場において、雑種第4世代で個体選抜を行い、以後系統栽培により選抜固定をはかってきた。

昭和54年以降は生産力検定試験、特性検定試験に供試し、昭和55年以降は「青系89号」の系統名を付して、奨励品種決定基本調査に供試してきた。翌56年以降は、現地調査に供試して地域適応性を検討してきた。

昭和61年は雑種第13代である。なお本品種は、昭和61年11月21日付けで種苗法に基づき品種登録された（登録番号1206号）。

表 1 一般特性一覧

品 種 名	稈		芒		粒着 密度	脱粒 難易	玄 米		耐 病 虫 性			穂 発 性	耐 倒 性	耐冷性
	細太	剛柔	多小	長短			大小	品質	葉いもち	穂いもち	カラバエ			
むつほまれ	やや太	剛	稀	極短	密	難	やや少	上下	やや強	やや強	やや弱	難	強	やや強
アキヒカリ	やや太	剛	極少	短	密	難	やや少	上下	やや強	やや強	弱	難	強	中

3 特 性 の 概 要

育成地における「むつほまれ」の一般的特性はおおよそ次のとおりである。

苗型は「アキヒカリ」に類似し、葉幅はやや狭く、葉齢は確保しにくい。苗の風乾重も「アキヒカリ」より劣る（表2）。本田の分けつは「アキヒカリ」よりやや少なく、生育中期の草丈は「アキヒカリ」に比べやや長く、多肥条件で伸長しやすい。葉色は「アキヒカリ」より淡く、特に幼穂形成期頃の葉色は「アキヒカリ」との差が顕著である（表3）。

出葉速度は「アキヒカリ」よりやや遅く、最終葉齢は少ない（表4）。葉身は「アキヒカリ」より長く、止葉は直立し、穂揃後の草丈は良い。出穂後の下葉枯れは「アキヒカリ」よりやや早い。成熟期の稈長は「アキヒカリ」並かやや長く、穂長は「アキヒカリ」より短い。穂数は「アキ

表 2 移植時の苗の生育調査

年次	品 種	む つ ほ ま れ			ア キ ヒ カ リ		
		草丈 (cm)	葉 齢 (葉)	風 乾 重 (g/100本)	草丈 (cm)	葉 齢 (葉)	風 乾 重 (g/100本)
56		15.1	3.3	2.25	16.6	3.4	2.48
57		17.6	3.4	2.23	15.6	3.6	2.38
55		16.3	3.2	2.23	17.5	3.3	2.78
59		14.3	3.8	2.20	15.1	3.9	2.30
60		18.1	3.2	2.49	16.5	3.5	2.72

注. 40個体調査。

表 3 葉色値と茎葉窒素含有率との関係

品 種 名	7 月 6 日 (穂首分化期)			7 月 15 日 (幼穂形成期)		
	N %	グリーンメーター	ミノルタ	N %	グリーンメーター	ミノルタ
むつほまれ	2.86	1.38	35.5	2.13	1.18	34.4
アキヒカリ	2.96	1.36	37.7	2.04	1.26	36.6

注. 基肥窒素量 8g/m²

ヒカリ」並かやや少なく、草型は偏穂重型に属する。

出穂期は「アキヒカリ」並か半日程度早く、成熟期は同程度で、育成地では中生の早に属する(表5)。

籾数の確保は「アキヒカリ」同様容易で登熟も良い(図1)。

みかけの品質は「アキヒカリ」並であるが、多肥条件では年次によって劣る(表7)。

その他の特性については表1に示すとおりである。

表4 葉齢の推移(葉) (黒石)

品種名	6月			7月		最終葉齢
	10日	20日	30日	10日	20日	
むつはまれ	5.6	7.0	8.4	9.6	10.8	12.4
アキヒカリ	5.8	7.3	8.8	10.2	11.4	13.3

注. 昭和56～60年の平均値

表5 生育及び収量調査成績

(黒石)

施肥区分	品種名	出穂期(月・日)	成熟期(月・日)	稈長(cm)	穂長(m)	穂数(本/㎡)	精玄米重(kg/a)	同左比率(%)	玄米千粒重(g)
標準区	むつはなみ	8.10	9.27	78	17.1	429	64.7	101	22.3
	アキヒカリ	8.10	9.27	77	17.7	440	64.3	(100)	22.3
多肥区	むつはなみ	8.10	9.30	82	17.6	466	65.3	101	21.9
	アキヒカリ	8.10	9.30	80	17.8	479	64.9	(100)	21.9
深追区	むつはなみ	8.8	9.26	77	18.2	398	65.3	100	22.4
	アキヒカリ	8.9	9.25	76	18.3	417	64.8	(100)	22.3

注. 昭和56～60年の平均値

窒素量(kg/a) 標準区 0.9 + 0.2 (表追) 多肥区 1.2 + 0.3 (表追) 深追区 0.5 + 0.6 (深追)

4 収量性

黒石における収量調査結果を表5に示した。「むつはまれ」の収量は「アキヒカリ」と同程度であり、奨励品種決定基本調査、現地調査5カ年の成績をアキヒカリ対比の指数でみると、「むつはまれ」の収量は「アキヒカリ」よりやや高い(表6)。以上のことから「むつはまれ」は中生種として、「アキヒカリ」並に安定した高い収量性をもつと推察される。

表6 指数(アキヒカリ対比)の階級別試験地数

階級	90以下	90～95	96～100	101～105	106～110	111以上
玄米収量	1	6	22	20	12	3
穂数	11	11	21	8	9	3

注. 試験年次5か年(昭和56～60年)と県内13試験地をこみにしている。

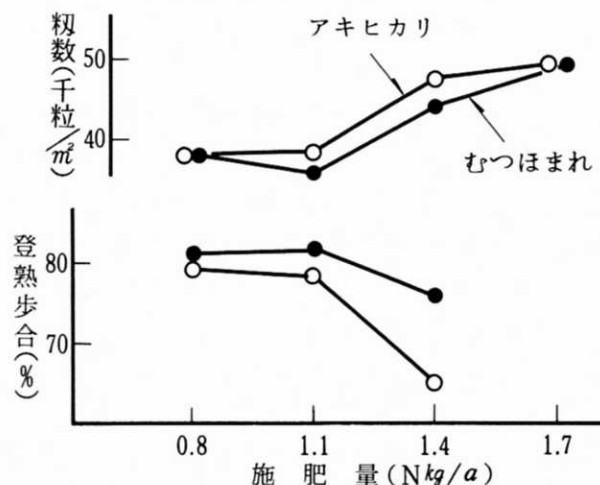


図1 施肥量と籾数及び登熟歩合 (昭和57年, 黒石)

表7 検査等級別試験地数

品種名	1等			2等			3等		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下
むつはまれ	17	17	10	5	4	6	1	1	1
アキヒカリ	15	22	7	7	1	7	1	1	1

注. 試験年次5か年(昭和56～60年)と県内13試験地をこみにしている。

5 まとめ

「むつはまれ」は籾数の確保が容易で登熟が良いことから、「アキヒカリ」同様高い収量性を示す。しかし、「アキヒカリ」に比較して穂数確保がしにくいので、実際の栽培にあたっては、健苗の育成、初期生育の促進による有効茎の早期確保で、穂数の確保に努めることが必要である。